



書初め



新年の門出を祝う楽しみとして、1月8日に各棟で年明け書初めを行いました。それぞれのやりたい事、好きな事を思い浮かべながら、皆さん綺麗に書初めを行いました。

(支援員 上田真史)

鏡開き



1月13日に鏡開きを実施しました。「鏡開き」はお正月に飾った「鏡餅」を下げて無病息災を願って食べる行事と言われています。施設では利用者と職員の皆さんに食べやすいように、ぜんざいを提供しました。残念ながら、お餅は入っていませんでしたが、あたたかくて甘いぜんざいは喜ばれていました。

(栄養士 山本陽子)

生活フロア便り

今号は視覚支援について紹介します。視覚支援とは、言葉だけでは伝わりにくい情報を絵や写真、文字などで「見える化」し、目で見てわかるように伝える支援方法です。発達特性のある人が、行動の見通しを立てたり、指示を理解したり、気持ちを表現したりするのを助け、不安や混乱を減らし、自立を促す目的でスケジュール管理や手順の提示など様々な場面で活用されます。

具体的な方法

- ・スケジュールボード…「起きる→着替える→ごはん→トイレ…」のように、一日の流れを絵や写真で示します。
- ・絵カード・写真…「着替える」の絵や写真、手洗いの手順写真など、具体的な行動を促します。
- ・ピクトグラム…施設の案内や手順に使うシンボルマークです。
- ・実物・写真…抽象的な絵よりも、本物に近い写真や実物を使うとより分かりやすい場合があります。
- ・タイマー…タイムタイマー
(残り時間を色で視覚的に表示するアナログ式のタイマーです)。



上記で紹介した「見える化」はほんの一部ですが、実は、私たちの日常生活でもよく目にします。たとえば、家具を組み立てる時、文章だけの説明書よりも写真やイラストがついている説明書の方が作業しやすいです。広大なショッピングモールでトイレを探す際は、頭上の案内表示(ピクトグラム)に沿って移動します。このように、「見える化」は私たちの日常生活にも溶け込み、それを頼りに生活しています。

ご利用者が生活するフロアにおいても、「目で見て分かる形で伝える」ことに注力しています。尚、「見える化」のグッズは、ご利用者一人ひとりに合わせて理解できる形で提示する必要があるため、その殆どが支援員の手作りです。今後も「見える化」を増やすことで、ご利用者がより安心して生活できるよう支援していきます。

女性棟係長 塩川佳子

看護師便り

去年はインフルエンザウイルスやコロナウイルスの感染症が発生しましたが、職員一人ひとりが連携し、感染対応することで、早期に終息し乗り切ることができました。ご利用者の中には、症状が訴えられない方もいらっしゃるため、普段の様子と違うなど、小さな変化も見逃さず早期発見に繋げ、安心して過ごしていただけるように致します。

和泉の里 看護師一同

